

であい



公益社団法人
北海道国際交流・協力総合センター
HIECC / ハイエック

Hokkaido International Exchange and Cooperation Center

7月25日(土)・26日(日)の二日間、北海道内の大学に学ぶ外国人留学生26名(17カ国・地域)が新ひだか町を訪れ、地元で開催された「新ひだか夏まつり」へ参加するとともに、アイヌ文化体験を通じて伝統文化への取り組みについて学んだ。

新ひだか夏まつり参加(25日)

留学生一行は札幌からバスで約2時間の道のりを経て新ひだか町公民館に到着。酒井芳秀町長の歓迎をいただいた後、早速、公民館内で行われていた「全道阿波踊り大会」のエキシビジョンを見学、ステージ上の華やかな舞いに魅了されつつ踊り方を学んだ。(阿波踊りは、もともと四国徳島県の伝統芸能であるが、新ひだか町では、阿波踊りを北海道において郷土芸能として継承している愛好会が、夏まつりの開催にあわせて一堂に介し、阿波踊りの振興や地方伝統文化の発展等を目指して全道阿波踊り大会を実施している。)

その後、地域交流センター・ピュアプラザに会場を移し、酒井町長から改めて歓迎のご挨拶をいただいた後、法被と豆絞りを着て「しずない愛好会・さくら連」の踊り手2名の指導のもと、阿波踊りの練習を行った。はじめのうちは手と足の動きが合わず苦労していたが、次第に慣れてくると、「ヤットサー、ヤットサー」と独特のかけ声でリズムを合わせ、上手に踊れるようになった。本番時はあいにく小雨となったが、メイン会場である「みゆき通り」において、全員で阿波踊りを披露。沿道からの大きな声援を受けながら懸命に20分間のパレードを踊りきり、新ひだか町の暑い夏のひとときを盛り上げた。多数の留学生曰く、「記憶に残るすばらしい体験」となった。



新ひだか夏祭りに参加



阿波踊りパレード本番

アイヌ文化体験(26日)

二日目もあいにくの雨の中ではあったが、アイヌ文化体験を行った。今年4月にオープンしたばかりの新ひだか町博物館を訪れ、学芸員からの説明のもと、新ひだか町の歴史やアイヌに関する展示資料を見学し

た。アイヌの歴史は1万年以上にさかのぼるが、現在伝承されている独特の踊りや衣装などの文化は約300年前に確認されているものであり、いかにしてこのような文化が生まれたかについては不明な部分が多いという話など、留学生は感心しながら学芸員の話に聞き入っていた。その後、アイヌ民俗資料館の見学を経て、シャクシャイン記念館にて、静内民族文化保存会の協力を得て、アイヌ民族舞踊体験を行った。(同保存会は昭和36年4月に設立され、静内地方のアイヌ古式舞踊を伝承・保存する活動を行っている。)同保存会から約15名が参加する中、アイヌ民族舞踊の披露や、特にエレムコイキ(ねずみ捕りの遊び)という演目では、留学生もお菓子を狙うねずみ役を体験するなど、ともに盛り上がり楽しんで。また、返礼としてパラグアイから参加した留学生から民族舞踊の「ムヘル・パラグアジャ」という祝いの場で踊られる踊りが披露された。



アイヌ民族の遊びエレムコイキ(ねずみ捕りの踊り)で一緒に楽しんだ

ふりかえり(グループディスカッション)

交流の最後にはグループディスカッションを行った。2日間の感想として留学生からは、「阿波踊りやアイヌ体験を通して文化の多様性が感じられた」「阿波踊りの時に沿道からの応援が嬉しかった。まちの人々の温かさを感じた」「アイヌの子ども達との交流が楽しかった」などの感想があり、続いて伝統文化を活かした地域づくりをテーマに話し合ったところでは、「アイヌ民族ツアーを企画したら外国人がたくさん参加すると思う」「宿や交通の情報なども合わせてインターネットなどで積極的にPRしてはどうか」「伝統工芸のワークショップなど体験型観光の企画を」「伝統文化の保存のために学校でアイヌに興味を持ってもらう取り組みが必要」など様々な意見が出された。



グループディスカッションの様子

留学生交流がもたらすもの

今回は17カ国・地域からの留学生の参加があったことから「いろいろな国の人と意見交換できて勉強になった」という感想が多数寄せられた。また、「自国の文化とアイヌ文化を比較し、知らなかったことを学べた」という感想もあり、2日間の交流を通じて、留学生には様々な形で異文化を体験することができたようであった。また、新ひだか町からも「留学生が参加してくれたことで祭りが盛り上がった」「町内では異文化に触れる機会が少ないので、こちらとしても勉強になった」などの意見をいただいた。

留学生交流は、留学生のみならず、地域の人々にも異文化を体験してもらう良い機会となることから、当センターとしても引き続きこうした取り組みを継続していきたいと考えている。

特集

留学生ふれあい交流 in 新ひだか
新ひだか夏まつり参加とアイヌ文化体験を実施



Word実習の様子

阿部 幸太郎 さん

21世紀最初の独立国、東ティモール。名実共に独立したのは2002年。歴史はあるが国家としてはまだまだ若い東南アジア赤道直下のこの国に来て約1ヶ月後、ただでさえ語学は苦手で、現地の言葉(テトゥン語)で挨拶と疑問詞を覚えた程度、そして現地の教育事情もまだわからない私にたくさんの壁が立ちちはだかった。「早く実習を担当し、中学生向けの放課後クラスも行ってほしい」という学校の要望や、「なんでこの外国人は何もできないのだろうか?」といった視線、自分が育ってきた日本の学校とは異なる教育現場など挙げればキリがない。何かしなければと必死だったが、すぐには何もできずあらゆることがダメに思っていた。そんな時、私を救ってくれたのは同い年の教頭先生の言葉、「Kotaro, mai ita servisu hamutuku hanesan(幸太郎、僕たちは同じように(同じ立場で)働こう)」だった。

私は東ティモールや学校のために外国人として「何かしてあげなければ」と無意識に思っていたのだろう。一人の人として、配属先の一教員として、目の前の生徒たちや同僚と同じ目線で彼らと向かい合えたとき、私の国際協力活動は動き出したのだと思う。

勉強で一度つまづいてしまった子どもは置き去りになって

しまいがちな現地の教育環境。中学生や高校生の頃、勉強が苦手だった私に対して辛抱強く向かい合ってくれた先生たちのよう、つまづいている生徒が小さな成功体験を積み重ねて、自分で可能性を切り開くことができるようになればと、精一杯の思いと力で教壇に立った。ただの日本人が任期中に一人で行えることなど微々たるものだが、仲間との協力で少しでもその輪が広がり、「幸太郎のクラスで勉強が面白くなった」と言ってくれた生徒がいたことはせめてもの救いである。

帰国後、私は派遣前よりお手伝いしていた重度障がい(ALS:筋萎縮性側索硬化症などの難病)を抱える方のコミュニケーション支援を行うNPO法人で活動している。「誰かの可能性を拡げたい」という自分の思いと、「関わる方々と同じ目線に立ってこそ見える現場」のバランスを取り、今後も自分のできることを精一杯頑張っていきたい。

青年海外協力隊 平成25年度3次隊

職種：PCインストラクター(教会の運営する高校でMS Officeの実習を中心に授業を担当)

派遣国：東ティモール(首都ディリで活動)



帰国日に見送ってくれた生徒たちと同僚たち(写真上段中央が筆者)

カルチャーナイト2015 @HIECC

7月17日(金)

午後6時半～午後9時

やブラジルのフルーツジュースを飲みながら、子どもたちは留学生が用意してきた景色や街並みの写真を見たりしながら、会話を弾ませていた。

HIECCでは、9か国・地域12名からなる札幌市内の留学生や在住外国人の方々の協力を得てカルチャーナイトに参加し、毎年人気の4つのコーナー「世界の遊びとクイズ」、「ワールド・カフェ」、「世界の民族衣装を着てみよう」、「世界のお茶を飲んでみよう」でプログラムを構成。また、北海学園大学人文学部の学生11名が、通訳や案内役としてイベント運営のアシスタントとして大活躍した。

フランス、ネパール、マレーシア、中国、台湾などからの留学生と気軽にしゃべりできる「ワールド・カフェ」。会場前で振る舞われたアルゼンチンのマテ茶



どれにしようか迷ってしまう南米やアジアの飲み物のコーナー



壺を落とさず見事にステップを踏むパラグアイの留学生

「世界の遊びとクイズ」はインド、中国、南米3か国(ブラジル、パラグアイ、アルゼンチン)の留学生が担当し3回に分かれて実施。インドの留学生からの出されたクイズには難問が含まれており、参加者のほとんどが意外な答えに「えーっ!」と驚く場面も。中国の留学生が用意した2つのゲームは子どもたちに大好評。夢中になってゲームに挑戦し、体を動かしながらお隣の国を身近に感じる好機となっていた。最後に、パラグアイの留学生が披露した伝統舞踊「ムヘル・パラグアジャ」では、美しい衣装に身を包んだ留学生が、頭上に壺をバランスよく載せて踊る美技を披露。会場にいる参加者全員が優雅な踊りに心奪われ、華やかな雰囲気イベントの幕が下ろされた。

カルチャーナイトは北欧が発祥の行事で、普段は日中しか開いていない公共施設や文化施設などを夜間開放し、子どもだけでなく大人を含む市民、観光客など誰もが地域の文化を楽しめる行事として始まり、今年で開催13回目を迎える。札幌市内だけでも100カ所以上の施設が参加し、HIECCとしては12回目の参加となった。

平成27年度

第1回 ぐる〜りワールド 交流会 in 苫小牧

(8月23日 日曜日 苫小牧市ふなと公園 港園亭)

苫小牧市の国際交流推進事業の一環として10年以上実施されている「ぐる〜りワールド交流会」が苫小牧港近くの港園亭で行われ、苫小牧市民約82名と12ヵ国26名からなる苫小牧在住の外国人が参加した。

開始前から参加者同士が「久しぶり!」と声を掛け合うなど、すでにアットホームな雰囲気が。市役所職員も休み返上で串焼きパンの生地作りや炭おこしの裏方作業に徹しながら、手作りの温かな空気に包まれながらイベントがスタート。参加者は事前に分けられたグループの炉に分かれ、苫小牧の有名菓子店に特注したパン生地を思い思いの形で竹に巻いてスタンバイ。あとは、炭火でじっくり時間をかけながらパンの焼きあがりを楽しみに待ち、その間は、お隣同士で楽しく日本語や英語で会話が弾んでいた。



炭火で串焼きパンがうま〜く焼きあがるかな

「交流会に参加するのは初めてです」と語っていたのは私立幼稚園で英語教師として働くフィリピン・ミンダナオ出身のテッサさん。「4か月前から苫小牧に住み始めたけど、まだ冬を経験してない

のが少し不安」と話していたが、同じく英語教師としてすでに活躍しているフィリピン人の先輩など同国出身のコミュニティの繋がりがあり、頼もしく感じているようだった。苫小牧駒澤大学で学ぶ留学生も多く参加。ベトナム人留学生のツオンさんは、「苫小牧にきた頃はベトナム人が一人しかなくてさみしかったけど、今は市内に15人以上いて自分の国のネットワークが広がってうれしい」と話していた。

イベントには小中学生から英会話サークルに参加している主婦まで様々な世代が参加。市の担当者によると今回は過去最高の応募があり、参加者も多かったとのこと。市民が地域に住む外国人と関わりを持ち、また外国人側も自国の料理や語学を通して交流する機会をもつことで、共に学び合い地域を豊かにしている様子が会場に終始響き渡る参加者同士の楽しそうな声から伝わってきた。



参加者全員が大集合しての記念写真

平成27年度 地域国際化ステップアップセミナー(北海道地域)



「地域のブランド力を高める国際協力」

(9月4日 金曜日 札幌市教育文化会館)

グローバル化が加速的に進む国際社会において、日本の自治体にどのようなことが求められているかを国際協力活動に関連する具体的事例から学び考えるセミナーが札幌市教育文化会館で開催された。(主催：(一財)自治体国際化協会(市民国際プラザ)、共催：(公社)北海道国際交流・協力総合センター、JICA北海道、後援：北海道、札幌市等)



滝川市の山内氏の事例発表を真剣に聞く参加者

国連開発計画 (UNDP) 駐日代表の近藤哲生氏による話題提供では、「ミレニアム開発目標 (MDGs)」の達成期限である2015年以降の国際開発目標として今年の9月に国連総会で採択予定の「持続可能な開発目標 (SDGs)」の話題から、「17項目の目標達成には地域コミュニティの国際化が必須であり、ここにいる参加者全員が無関係ではない」という言葉があった。

次に、滝川市総務部国際課長の山内康裕氏からの事例発表。市の産業の一つである農業と「国際協力」を活用しスタートしたのが、今から15年前。地域の方に、地元のよさを知ってもらいたいという思いから始まった。アフリカ・マラウイ共和国からの農業技術研修員の受入も消極的な農家が多かったが、「研修員の人柄が良く大変ラッ

キーだった」と山内氏が振り返り、事業に対してあまり好意的ではなかった農家の態度も好転。そこから「国際協力」の取組みが拡がりを見せ、事業開始をした2000年に来滝した外国人336人日(人数と日数)に対し、2013年には1,710人日の約5倍までに増加。15年間粘り強く取り組んできた中で、教育面へのインパクトも次第に表れ、市内の高校が文部科学省のスーパーイングリッシュランゲージハイスクールなどに認定された。今では言葉が通じなくても外国人を受入れる土壌へと変わり、「住民の意識が様々な国に“知り合いの〇〇さんがいる”という感覚になった」という山内氏の言葉が印象的だった。

引き続き、株式会社ちば南房総取締役の加藤文男氏とフェアトレードシティックまもと推進委員会代表理事の明石祥子氏による事例発表もあり、参加者は様々な角度から地域と国際協力を結びつける可能性を学んだ。最後は地元の「地域ブランドを活用した国際協力活動とは」などを自由に話し合うディスカッションがあり、参加者が事例発表や意見交換から様々なアイデアを得られる機会となっていた。



地域の魅力を再確認した参加者同士の意見交換

すっぽろ 留学生日記

憧れていた雪に毎年感動!
何事も積極的に楽しみ
学業も生活も両立



ハリー メネセス さん
インド共和国
(北海道大学大学院生命科学院
電子科学研究所)

より良い環境で専門を深めたい

インドの大学で化学を専攻し、研究施設でのプロジェクトアシスタントの経験もあるハリーさん。北海道での留学に至った経緯を尋ねると、「自分の専門分野の知識を深め、インドとは異なる研究環境を経験したいと思い留学しました。光化学や液晶分野を専門とする学生にとって、日本はベストだし人気もありますよ」と難しい専門用語を易しい表現に変えながら教えてくれた。北大では大学院を希望する留学生を毎年7名受入れるプログラムがあり、5年前に応募し2011年の秋から研究生活がスタート。在学期間中は留学生で組織する会の役員も務めるなど学業以外にも積極的に取り組んだ。「留学の選考も約1年間かかったし、留学生組織の打合せも回数が多くたくさん時間をかけていた。時間の考え方がインドと違うことが印象的でした。」

憧れていた冬の生活

高温多湿なインド南部のウドゥピという市の出身で、雪には全く縁がなかった。ハリウッド映画で雪の映像を見ては憧れを抱き、初めて北海道で雪を見たときの感動は忘れられないそう。「留学して4年経った今でも毎回感動しています」と目を輝かせながら語っていた。冬の生活の苦労は、

「半年間も続く冬を過ごし、春は永遠に来ないのではと思いました。コットン素材以外の服を着るのも初めてで、コートも着たことがありませんでした」とのこと。なお、ウドゥピには地域独自の言語があり、ハリーさんは5つの言葉を操りご両親も3～4つの言葉を話す。インドの公用語はヒンズー語と英語だが、ヒンズー語は国語ではないので全国民が話せるわけではない。広いインドでは当然のことかもしれない。

好きな言葉は“ありがとう”

来日前に知っていた日本語は“ありがとう”だけ。でも後で十分だったと気付いたそう。「日本ではバスの運転手や店員さんに対して“ありがとう”と言うのがとても好き。また、外国人に対しても失礼な態度を取る人もいないし、日本語が不自由な私が見せるジェスチャーを理解してくれる人がたくさんいますよ」と教えてくれた。3月で卒業を迎えるハリーさん。「最初は生魚に抵抗がありお寿司のおいしさが分からなかったので、帰国前にもう一度チャレンジしてみたい」とはにかみながら言っていた。学業も北海道での生活も積極的に楽しみ両立させてきたハリーさんの表情は生き生きとし、充実した時間を過ごしてきたことが映し出されているようだった。



ピンク色に染まった一面の桜を背景に



ハイエック(公益社団法人 北海道国際交流・協力総合センター) 会員 入会へのお願い



北海道国際交流・協力総合センター(HIECC / ハイエック)は、会員の会費で運営されています。北海道における国際活動の総合的、中核的な拠点として、世界各国との国際交流・協力活動などを通じて北海道の振興発展に貢献して参ります。

年会費	法人等会員	1口	10,000円
	一般個人会員	1口	5,000円
	学生・主婦・シニア等会員	1口	2,000円

入会のお申込みは随時受け付けております。
また、入会口数は1口に
限らず何口でも結構です。



会員特典

- 1 シンボルマークの会員バッジ進呈
- 2 季刊誌「Hoppoken」(年4回)、「年報」、国際協力情報紙「であい」(年3回)を配布。(ホームページの会員専用ページでは「Hoppoken」のバックナンバーの閲覧が可能)

HIECCの主な事業

国際交流・国際協力情報の提供、国際理解講演会・セミナーの開催、海外派遣事業、国際交流事業への助成、通訳ボランティアの派遣、留学生と地域のふれあい交流、調査研究事業など



公益社団法人
北海道国際交流・協力総合センター
HIECC / ハイエック

〒060-0003 札幌市中央区北3条西7丁目 道庁別館
発行日：2015年10月5日
TEL. 011(221)7840 FAX. 011(221)7845 <http://www.hiecc.or.jp>
E-mail: into@hiecc.or.jp (交流・協力部)
印刷：岩橋印刷株式会社